



(1) 玄界灘・海と人の物語

(2) 今、時空を超えて甦る弥生の王都～壱岐・原の辻遺跡～

I. はじめに

(1) 玄界灘に浮かぶ対馬島・壱岐島・沖ノ島と、韓国西海岸の竹幕洞遺跡

(2) 原の辻遺跡調査事務所が平成12年度に映像発信事業として製作

II. ビデオ上映

(1) 玄界灘・海と人の物語

NHK 九州沖縄スペシャル 平成15年(2003)3月27日放送から

(2) 今、時空を超えて甦る弥生の王都～壱岐・原の辻遺跡～

長崎県教育委員会 平成13年(2001)3月 製作から

III. 解説

IV. おわりに

『魏志』倭人伝に記された57文字の情報

又南渡一海千余里。名曰瀬海。至一大(支)國。官亦曰卑狗。副曰卑奴母離。方可三百里。多竹木叢林。有三千許家。差有田地。耕田猶不足食。亦南北市糴。

【訳文】

〔対馬国を出港し〕南に一海を渡ること千余里で一支国に到着する。この海は瀬海(かんかい)と名付けられる。〔対馬国と同じく〕大官は卑狗(ひこ)、次官は卑奴母離(ひなもり)という。広さ三百里ばかり、竹木や叢林が多く、三千ばかりの家がある。〔対馬国と比べると一支国は〕やや田地があるが、水田を耕しても皆が食べる量には足りず、やはり〔対馬国と同じく〕南や北のクニケニと交易をして暮らしている。

【お知らせ】

次回の館長講座は11月10日(日)13:30~(2時間程度) 講義室にて開催いたします。

倭人伝に記された「対馬国」の姿

玄界灘に浮かぶ絶島、対馬。

始度一海千余里至對馬國
其大官日卑狗副日卑奴母離

所居絶島方四百余里

土地山陰多深林道路如禽鹿徑

有千余戸無良田食海物自活

乘船南北市羅



4-1 リアス式海岸が入り組んだ浅茅湾の風景(写真提供:対馬市教育委員会)

対馬の海岸は、リアス式海岸が発達し複雑な入江を形成している。また、険峻な山々が全島を貫いており、平野が極めて少ない。

倭人伝は、「韓國から」始めて一海を度る千余里、
對馬(對海)国に至る。その大官を卑狗とい
い、副を卑奴母離という。居る所絶島、方四
百余里ばかり。土地は山陰しく、深林多く、
道路は禽鹿の徑の如し。千余戸あり。良田
なく、海物を食して自活し、船に乗りて南北
に市羅す。」

この記述からは、「対馬国」の地は、断崖
絶壁が多く、山が深く、道はけもの道のよ
うに細い。また、水田が少なく、人々は海産
物を食し、(米を獲るために)「南北市羅」、
つまり朝鮮半島と日本本土を往来し、交易
を行っていたことがわかる。さらに、対馬国
には、国を治める「卑狗」という大官と「卑
奴母離」という副官の二人の官人が居り、
国には一千余の家があつたこともわかる。

現在の対馬の風景、つまり、断崖に囲ま
れた島、険しい山塊、平野が狭少で水田耕

東夷伝倭人条以下、「倭人伝」に記され
た「対馬国」の比定地である。

倭人伝は、対馬国(紹熙本では「対海國」
と表記)についてこう記している。

「(韓國から)始めて一海を度る千余里、
對馬(對海)国に至る。その大官を卑狗とい
い、副を卑奴母離という。居る所絶島、方四
百余里ばかり。土地は山陰しく、深林多く、
道路は禽鹿の徑の如し。千余戸あり。良田
なく、海物を食して自活し、船に乗りて南北
に市羅す。」

この記述からは、「対馬国」の地は、断崖
絶壁が多く、山が深く、道はけもの道のよ
うに細い。また、水田が少なく、人々は海産
物を食し、(米を獲るために)「南北市羅」、
つまり朝鮮半島と日本本土を往来し、交易
を行っていたことがわかる。さらに、対馬国
には、国を治める「卑狗」という大官と「卑
奴母離」という副官の二人の官人が居り、
国には一千余の家があつたこともわかる。

現在の対馬の風景、つまり、断崖に囲ま
れた島、険しい山塊、平野が狭少で水田耕
作にむいていない地形などは、倭人伝に記
された「対馬国」の情景に通じるものがあ
る。紀行文風に書かれた「倭人伝」の描写は
非常に簡潔ながらも、わずか六四文字で
「対馬国」の姿をよくまとめているものとい
えよう。

大陸と日本列島をつなぐ「飛び石」
対馬の地勢

ここであらためて対馬の地勢をみてみよう。対馬は九州と朝鮮半島の海峡上に位置する、南北約八二km、東西約一八kmの細長い島で、佐渡・奄美大島に次いで日本で三番目に大きい島である。

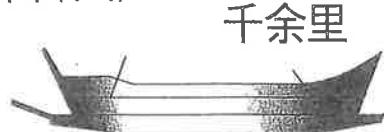
対馬から朝鮮半島南部との距離は最短で四九・五km。一方、対馬の南端から南隣の壱岐島までは約七〇km。さらに壱岐島から唐津呼子港までは約二七km。対馬から博多港までは約一七〇kmという海上距離にある。

晴れた日には、対馬の北側から釜山など朝鮮半島の山々や建物を望むことができ
るという。韓國から対馬・壱岐を飛び石のよ
うにつたい九州に至るルートは、常に陸地
を見ながら安全に玄界灘を航行できる航
路であり、倭人伝の時代のみならず現在で
もたくさんのが走っている。

対馬の海岸は、沈降と隆起によつてでき
たりアス式海岸が発達し、海岸線の総延長
は九一五kmにもなる。峻険な山々が全島を
貫いており、これら山麓は急崖になつていて
直接海に没するところが多く、これが海上
からみて絶海の孤島の感を深くしている。

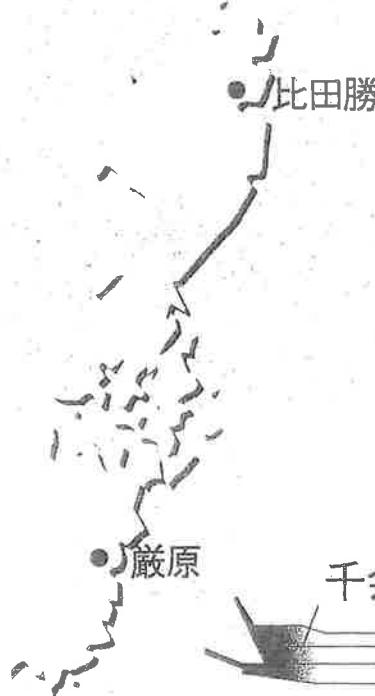
又南渡一海千餘里名曰瀚海至一大國官
亦曰卑狗副曰卑奴母離方可三百里多竹
木叢林有三千許家差有田地耕田猶不足
食亦南北市糴

(狗邪韓國)



千余里

(対馬國)



千余里

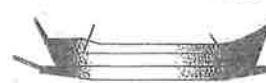
(三国志・魏志倭人伝)より

(一支國) 勝本

芦辺
郷ノ浦
石田

千余里

原の辻遺跡



福岡

呼子

唐津

(末盧國)

3

0

25km

五七 串山ミルメ浦遺跡

五八 天ヶ原遺跡

五九 松崎遺跡

六〇 カラカミ遺跡

六一 双六古墳

六二 対馬塚古墳

六三 笹塚古墳

六四 挂木古墳

六五 石路（イシロ）遺跡

六六 鬼の窟古墳

七〇 観上山古墳群

七一 大塚山古墳

七二 鬼屋窪古墳

七三 大原天神の森古墳群

七四 松尾古墳（永田一号墳）

七五 鎌崎遺跡

七六 名切遺跡

七七 大久保遺跡

七八 原の辻遺跡

六八 壱岐島分寺（国分寺）跡

六九 カジヤバ古墳

七〇 観上山古墳群

七一 大塚山古墳

七二 鬼屋窪古墳

七三 大原天神の森古墳群

七四 松尾古墳（永田一号墳）

七五 鎌崎遺跡

七六 名切遺跡

七七 大久保遺跡

七八 原の辻遺跡

長崎県教育委員会、一九六六年始、古代・長崎県資料編工

申叔舟『海東諸國紀』（一四七一年完成）

一岐島

郷七。水田六百二十町六段。人居は陸里十三、海浦十四なり。東西は半日程、南北は一日程なり。志佐・佐志・呼子・鳴打・塩津留分治す。市は三所有り。水田と旱田は相半す。土宣^{なかば}は五穀^ど。収税は対馬の如し。

一一岐島——長崎県壹岐郡。

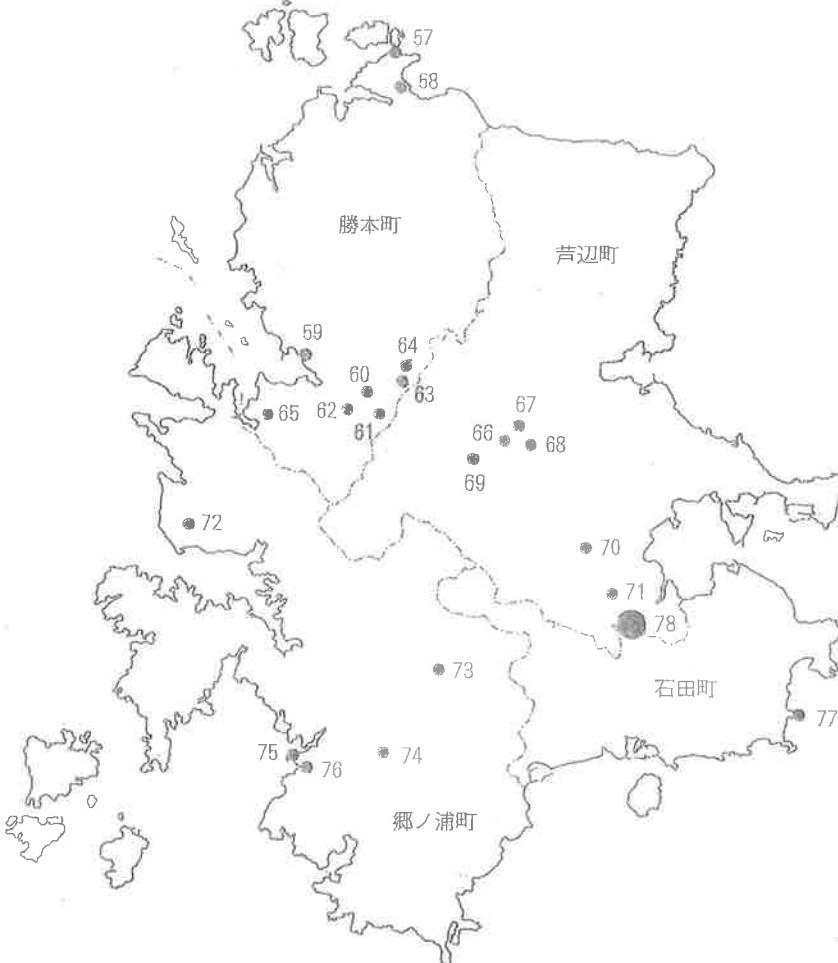
二 志佐——一四五五年七月、倭護軍藤九郎は姜孟卿の「志佐何等人」の質問に「一岐太守也、居肥州上松浦、使真弓為代官、守此地」と答えている（『世祖裏録』元年七月丁酉条）。

三 土宣——土産のもの。

四五穀——米・麦・粟・豆・黍・稗など主要な穀物。

壹岐主要遺跡

又、南一海を渡ること千余里。名づけて瀚^{かん}海^かという。一大國に至る。官をまた卑狗^{いぢ}といひ、副^{そく}を卑奴母離^{ひのめり}という。方三百里ばかり。竹木叢林^{ちばくそうりん}多く、三千ばかりの家あり。やや田地ありて、田を耕せども、なお食するに足らず。また南北に市糴^{いちく}す。

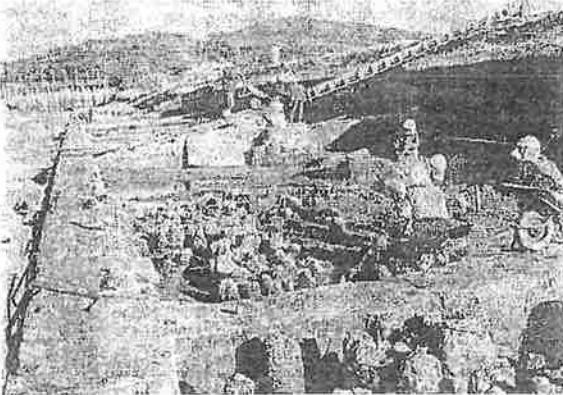


一支国の王都だった

長崎県壱岐 弥生時代の生活情報を提供

大規模な集落形成
いまから三十四年前の昭和三十六年の夏、大学四年生の私は、長崎県壱岐の原の辻遺跡において、発掘に積を出していた。東亞考古学会の調査に参加したときのことである。その当時、烟では、いたるところに弥生土器が散らばっていて、それが遺跡の宝庫である」と在をまざまざと見せつけていた。

魏志倭人伝の記述裏付け



一支国の王都と確認された長崎県壱岐の原の辻遺跡

三十五日間の調査を終えたとき、原の辻遺跡の広さと遺物の豊富さを改めて感心した私は、将来、長崎県立壱岐高等学校の教師になり、「生涯をかけて発掘したいものだと思つた。残念ながら、この夢は果たせなかつた。

さて、いま原の辻遺跡は、八〇年にわたり、そして、数万年前の旧石器時代から數千年前の中世まで、長期間に亘まれた巨大な複合遺跡であることがわかつてきただのである。そのうち、最も注目されるのが、弥生時代中・後期とりわけ紀元前

大規模な集落形成
いまから三十四年前の昭和三十六年の夏、大学四年生の私は、長崎県壱岐の原の辻遺跡において、発掘に積を出していた。東亞考古学会の調査に参加したときのことである。その当時、烟では、いたるところに弥生土器が散らばっていて、それが遺跡の宝庫である」と在をまざまざと見せつけていた。

魏志倭人伝の記述裏付け

支那の副葬品もしくは装身具

に元敵する。

他の集落群の頂点に

「こゝで、壱岐が『魏志倭人伝』に記された一大國、

言いかえれば『支国』(いき

この故地と想定される

ので、原の辻遺跡は、他の

中・小の集落群の頂点に立

つ、まさに『支国』の拠点的

な中心集落といえる。倭人

の辻遺跡は、『魏志倭人伝』によると、倭の国々はそ

れぞれ國邑を定めていたと

見えるが、こゝでいう國邑

とは國都あるいは首都を

指すものである。そうな

るで、原の辻遺跡はまさ

に存するのである。

支国の首都といえよう。

また、奴國や伊都國に王が

辻遺跡の発掘調査は、全體

(九州大学教授、考古学)

原の辻遺跡

発掘の意義

西谷 正



大規模な集落形成

後から三世紀にかけての、内・中・外の三重環濠も同じことがいえる。また、域が六カ所知られる。それ

大規模な集落を形成してい

る。内・中・外の三重環濠も同じことがいえる。また、域が六カ所知られる。それ

未解決問題も山積

として、前述長墓クラスの墳

墓は王墓といえよう。そ

う

に、その機能が推測される。つまり、それは、内濠内部の北端付近

に

ある一ヵ所を除くと、他

はすべて外濠の外側東南部

であらじ、『四糸』という

育長墓級の副葬品

がある。

そこで、

その

は

ある。

しかし、

その

は

ある。

そこで、

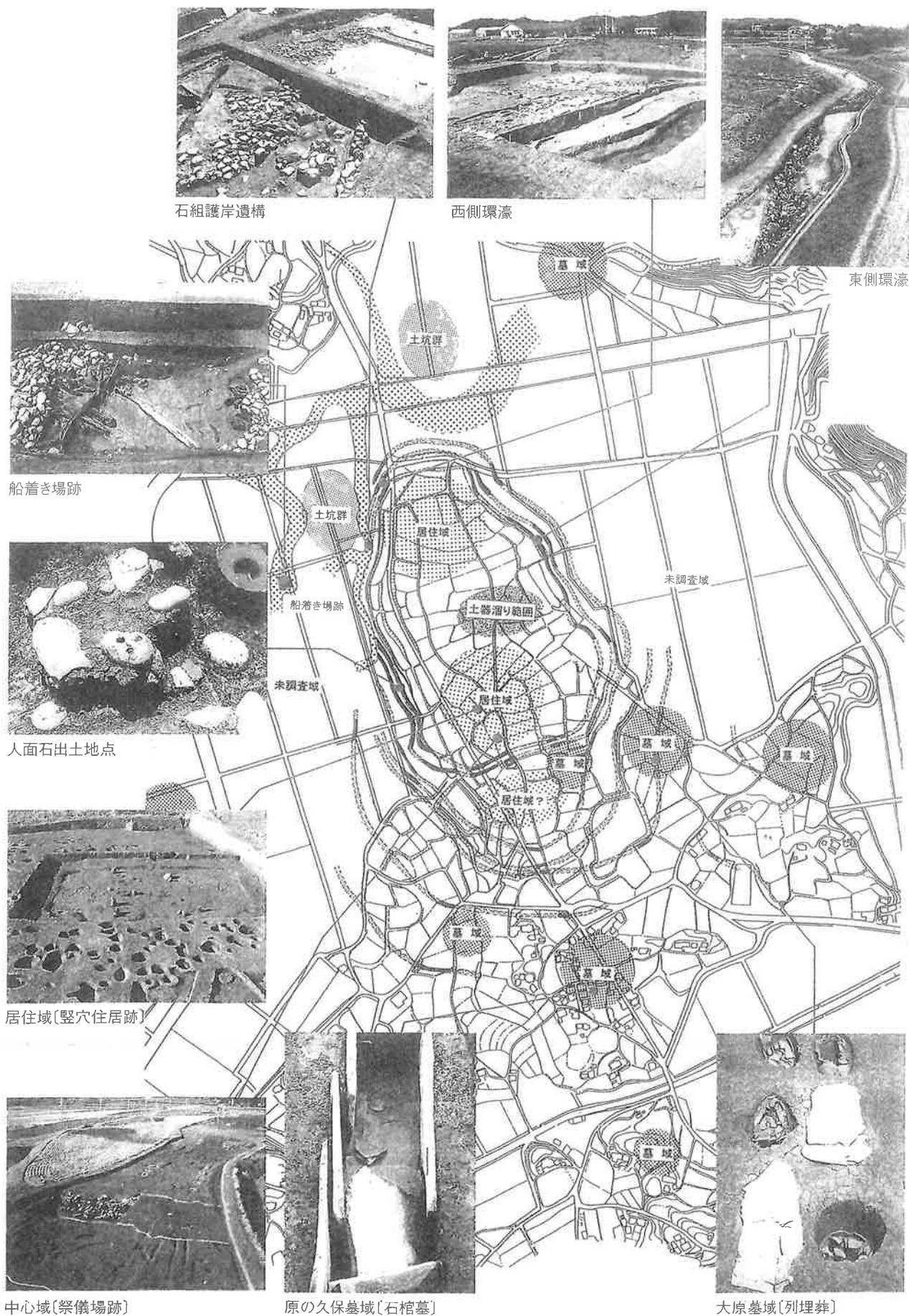
その

は

ある。

そこで、</p

原の辻遺跡概要図

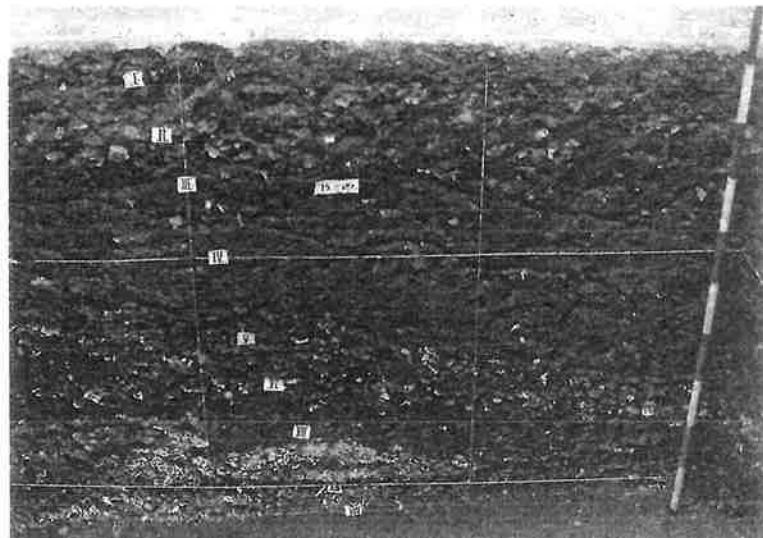


長岡市、2016『<魏志>倭人伝に記された一支国の世界』

海南 郡谷里貝塚

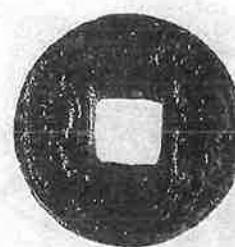
韓半島の南西端である海南 松旨面に位置する遺跡で、付近から同じ時期の住居址や窯跡なども発見された。

出土した土器は大部分が原三国期に該当するが、文様のないものが多く、上層では打捺文土器の比率が増える。最下層からは青銅器および初期鉄器時代に該当する黒色磨研土器と粘土帶土器が少量出土した。土器の種類は甕・短頸壺・鉢・甑・杯など多様で、祭祀用に使われたような小型土器もある。その他、土製の勾玉・珠・紡錘車・漁網錘とともに石刀・磨製石剣・石鎌・石斧などの石器類、斧・鎌・釣針などの鉄器類が出土した。また鹿角を加工して作った刀子の柄が多量に出土し、日常道具として刀子が広く使われていたことがわかる。そして骨や角で作った針・錐・鉛・掘棒・鎌などの道具と、占いに使用した卜骨も発見された。この他にも水晶やガラスでできた管玉・貨幣として利用された貝貨もある。交易を示すものに中国・新(8~23年)の貨幣である貨泉が出土しており、貝殻層の下から採取された炭の放射性炭素年代が紀元後70年(1880±80B.P.)であることから、貝塚の中心年代は紀元後1~2世紀であることを示している。

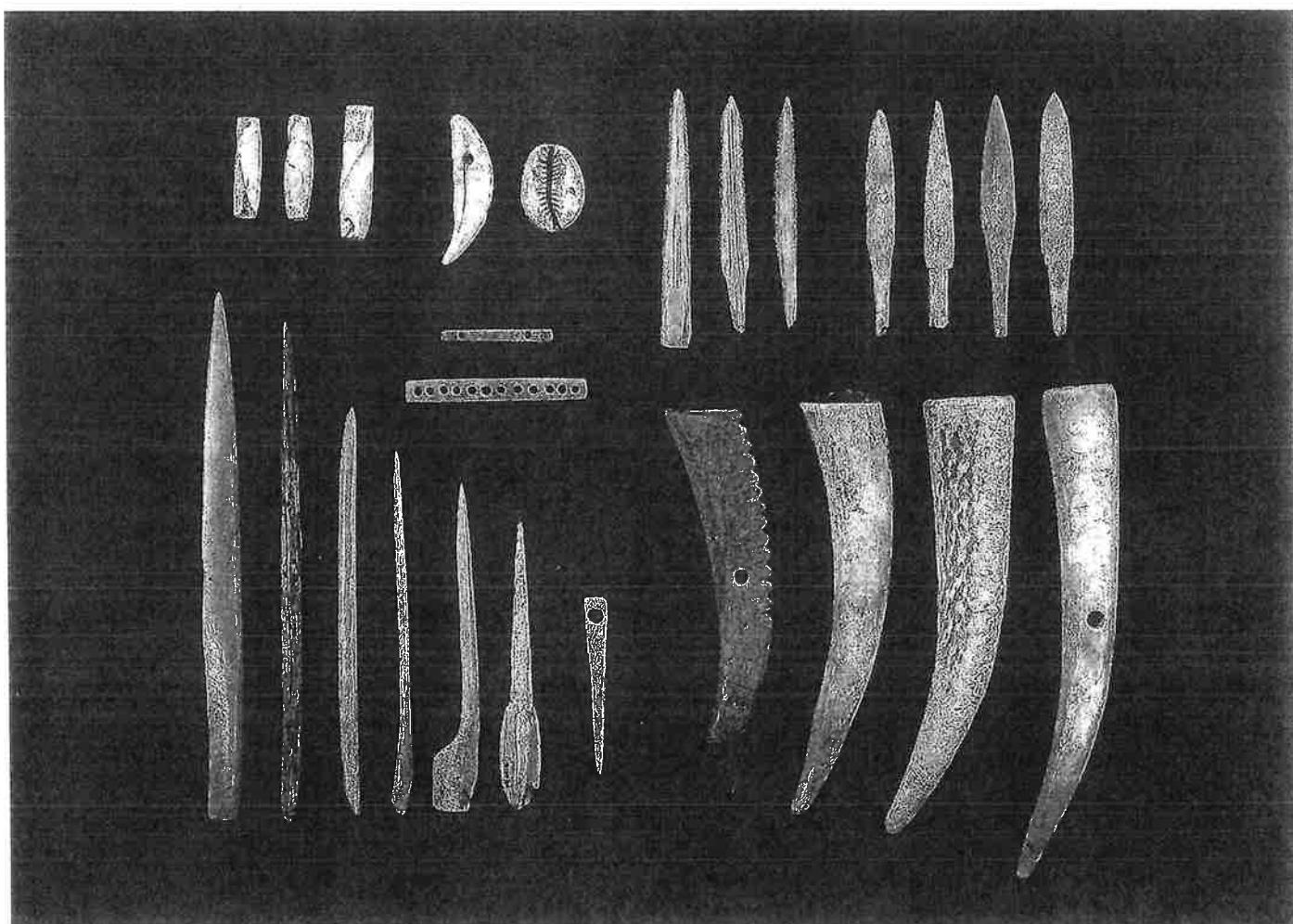


貝塚 層位, 海南 郡谷里貝塚

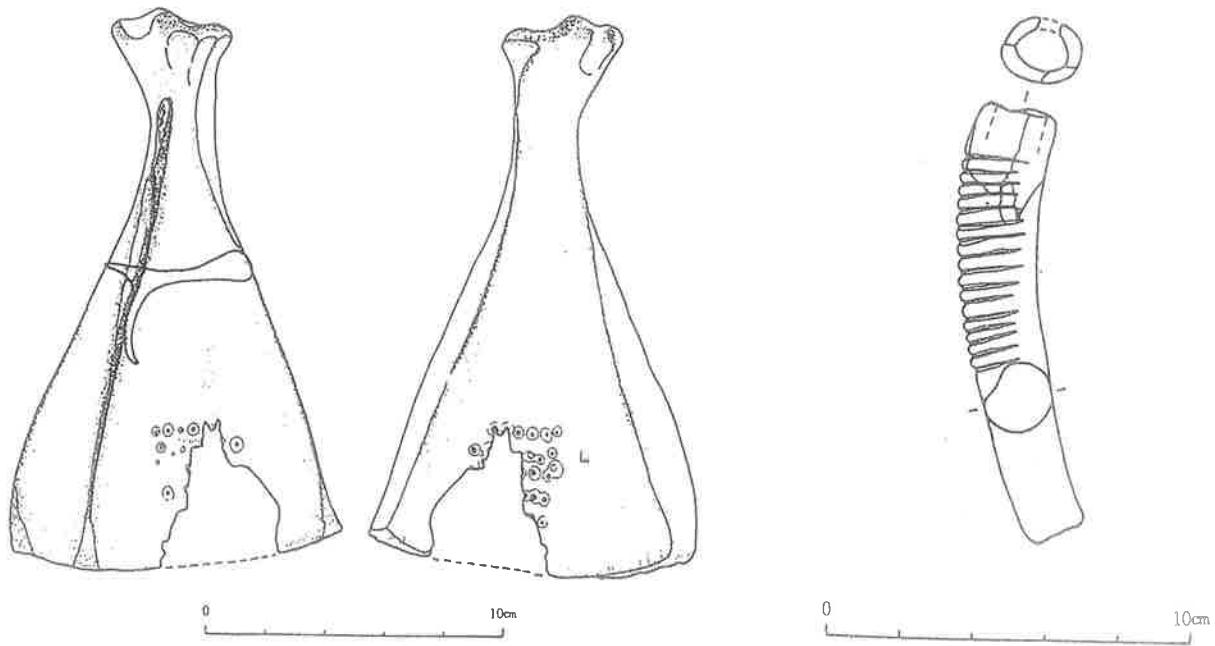
貨泉
海南 郡谷里貝塚
直径2.5cm
Coin



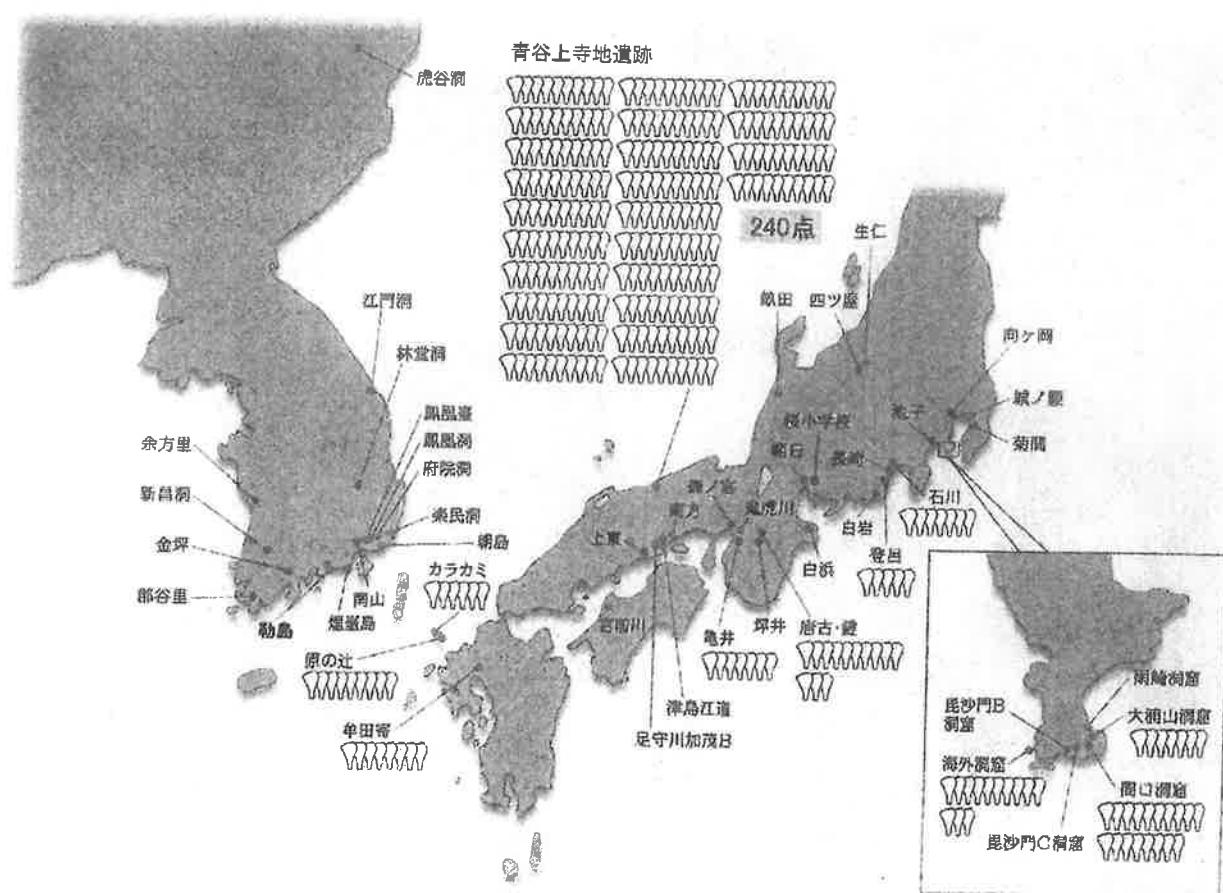
貝製装飾品・骨角器
海南 郡谷里貝塚
長さ(左下)14.7cm
Bone Tools



国立光州博物館, 2005『国立光州博物館 日本語版』図録

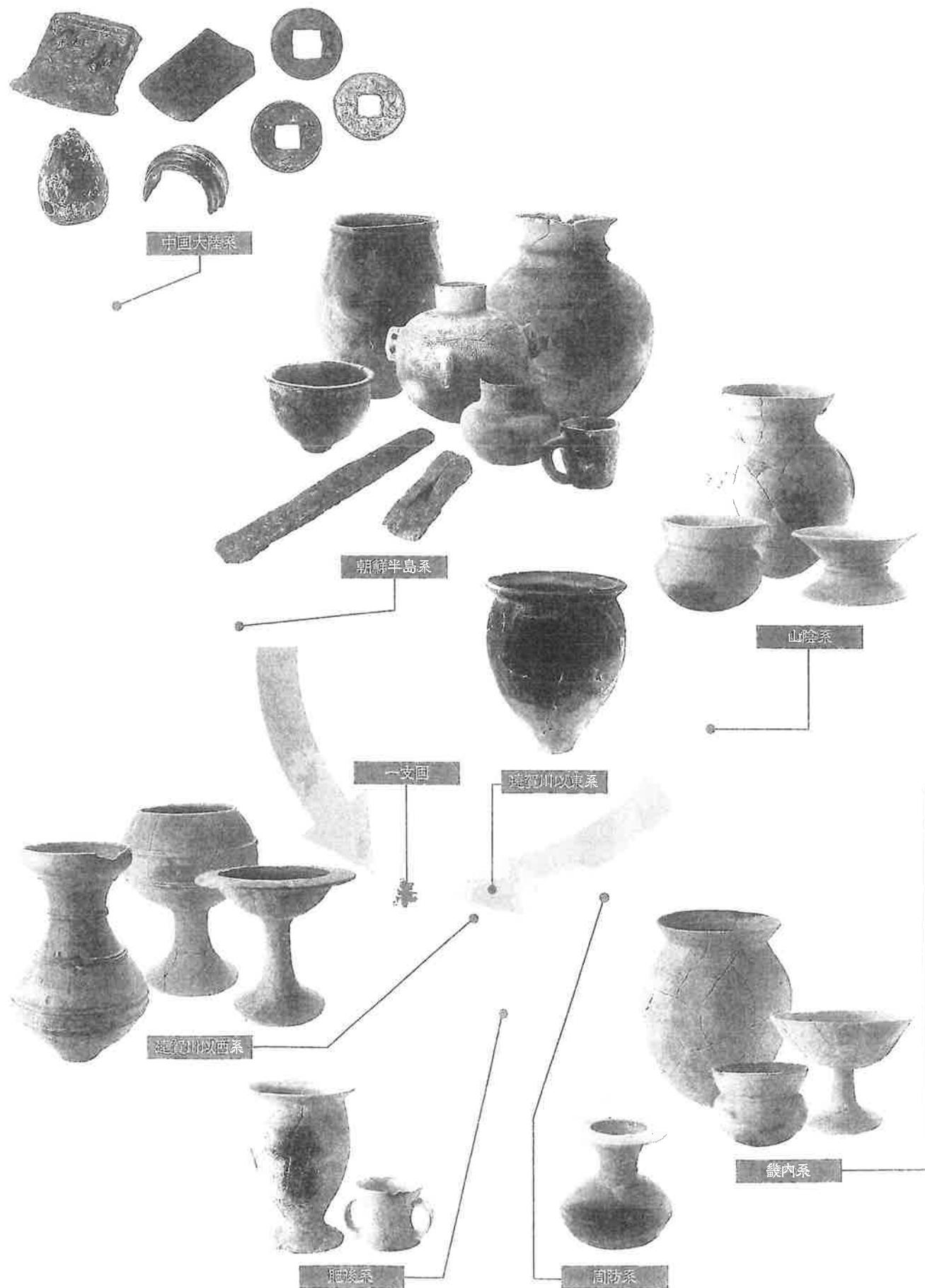


朝鮮·卜骨·周骨 全羅南道海南郡谷里里貝冢
崔盛浩, 1987『海南郡谷里貝冢』工文



ト骨の分布と出土点数

南北市罐ネットワーク〔一支国の交流範囲〕



高知市、2016.7.〈魏志〉倭人伝に記された「一支國」の世界

交易ネットワーク時期的変遷



韓国の「沖ノ島」—竹幕洞祭祀遺跡

沖ノ島の祭祀遺跡は、古代日本における国際交流に際しての国家的祭祀の遺跡として知られ、豊富で豪華な出土品から「海の正倉院」とも呼ばれる。つまり、古代日本は、主として古代の韓国と、ついで古代の中国と国際交流を頻繁に行つたので、そのつど沖ノ島の神に、航海の安全を祈願し、また、感謝の意を込めて、種々の文物を奉納したのであった。

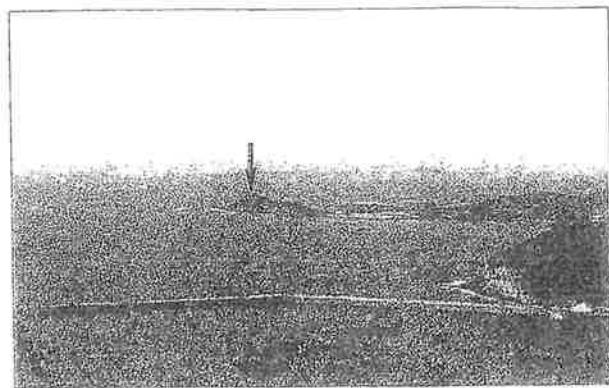
それならば当然、古代の韓国や中国においても、同じような祭祀遺跡があつてしかるべきであると考えられる。果して、1992年（平成4年）に、韓国において初めて、沖ノ島祭祀遺跡に比肩される祭祀遺跡が、国立全州博物館によって発掘調査されたのである。

ところは、韓国の西海岸地域に当たる全羅北道扶安郡辺山面格浦里竹幕洞に属する辺山半島の、海岸に突き出た岬の突端で、標高約22mの海蝕断崖の頂部に所在する。ここは、沖ノ島と違って立地が岬の突端であることと、沖ノ島では岩上から岩陰・半露天を経て、露天へと祭祀の場が変遷するのに対して、一貫して露天であったこと、そして、統一新羅時代の8世紀には祭祀建物があつたことなど、両者には相違点がいくつか見られる。とはいえ、東中国海を舞台とする壮大なスケールの国際交流に際して執り行われた祭祀の遺跡という点では、両遺跡に共通性が認められる。

さて、竹幕洞の祭祀遺跡は、古代において、沖ノ島の場合と同様に変遷が見られる。まず、原三国（馬韓）時代の3世紀後半のころから始まつたと思われる土器を用いた祭祀は、三国時代の百濟前期に当たる4世紀中ごろから5世紀前半にかけてのころ、本格化する。つまり、壺・甕や高坏などの土器を使って祭祀が行われた。土器にはもちろん、神に捧げるために用意された酒や山海の珍味などの飲食物が盛られていたことであろう。ついで、5世紀の中ごろになると、沖ノ島の出土品と酷似した有孔円板・蟬形品（劍形品）・鏡・短甲・刀子・斧・鎌・勾玉・鈴などの石製模造品が使われ始める。ちなみに、材質は沖ノ島では滑石製であるのに対して、竹幕洞はほとんど片岩製である点が異なる。これらの石製模造品は、『日本書紀』の記事などから類推して、神木に掛けて祭祀が行われたのであろう。そのころから6世紀前半にかけて、竹幕洞における祭祀は最高頂に達したと思われるほど、多量の土器が出土する。そればかりか、土器は壺・器台・甕のほか、坏・高坏・甕など種類が多くなり、また、大型の甕の中に鏡・武器・農工具・馬具などの金属製品を納めて奉獻したりしている。なお、土器の中には、ごくわずかとはいえ、倭の須恵器系統の土器も含まれる。鏡は百濟の小型銅鏡と鉄鏡である。武器は鉄剣・鉄矛などであり、また、農工具は鉄斧・鉄鍤などである。そして、馬具は鞍金具・杏葉・馬鐸などである。最後に、前述のとおり、統一新羅時代に当たる8世紀のころには祭祀用建物が出現していたといわれるが、土馬や土偶はそのころのものであろうか。竹幕洞では、古代以後も中・近世の高麗・李朝（朝鮮）時代を経て、現代まで信仰が生き続けている。現在、竹幕洞遺跡の上には、1864年に創建され、その後も4回にわたって増改築が繰り返された水聖堂と呼ばれる小祀が建っている。つまり、周辺住民が豊漁と航海の安全を祈って女神を奉賛しているのである。

ところで、竹幕洞における古代祭祀を振り返ると、当時の国際交流の諸段階が浮かび上がってくるのである。まず、3世紀後半では、帶方郡を通じての魏・西晋と馬韓・倭との交流が背景となっている可能性がある。ついで、5世紀中ごろから6世紀前半といえば、百濟と倭の密接な交流の時期に当たる。とくに、5世紀中ごろから後半の時期には、いわゆる倭の五王による中国・南朝への遣使が行われた。一方、百濟も4世紀中ごろから6世紀にかけて、中国の南朝と頻繁な外交関係を開いた。このことは、竹幕洞遺跡における南朝の青磁壺や黒褐釉甕などの出土からも裏づけられる。また、竹幕洞遺跡で出土した馬具のうち、龜甲繋文龍・鳳凰透彫の鞍金具や劍菱形の杏葉は、たとえば加耶古墳の陜川玉田M3号墳出土のそれらに共通する。土器についても、僅少とはいえ加耶土器の系統のものが見出せることも見落としてはならない。これらの事実は、加耶と百濟の交流を物語る一方、479年に加羅王荷知が南齊に通交したという記録を参考にすると、加耶の南朝への遣使に際して、竹幕洞で祭祀が行われた可能性も考えられるのである。最後に、統一新羅時代の8世紀といえば、古代の韓国や日本は中国へ盛んに遣唐使を送った。竹幕洞は、そのときも外交のルート上に位置したことはいうまでもない。

このように見えてくると、主として百濟の竹幕洞における祭祀遺跡と、その出土遺物は、中国の南朝と百濟・加耶・倭、そして、百濟と加耶・倭の間で展開した国際交流の一端を如実に物語ってくれる。ひるがえって日本における竹幕洞に相当するのが沖ノ島であつてみれば、古代の日本が、古代の韓国や中国の先進文明を受容するに当たって、沖ノ島は大きな役割を果たしたといえよう。

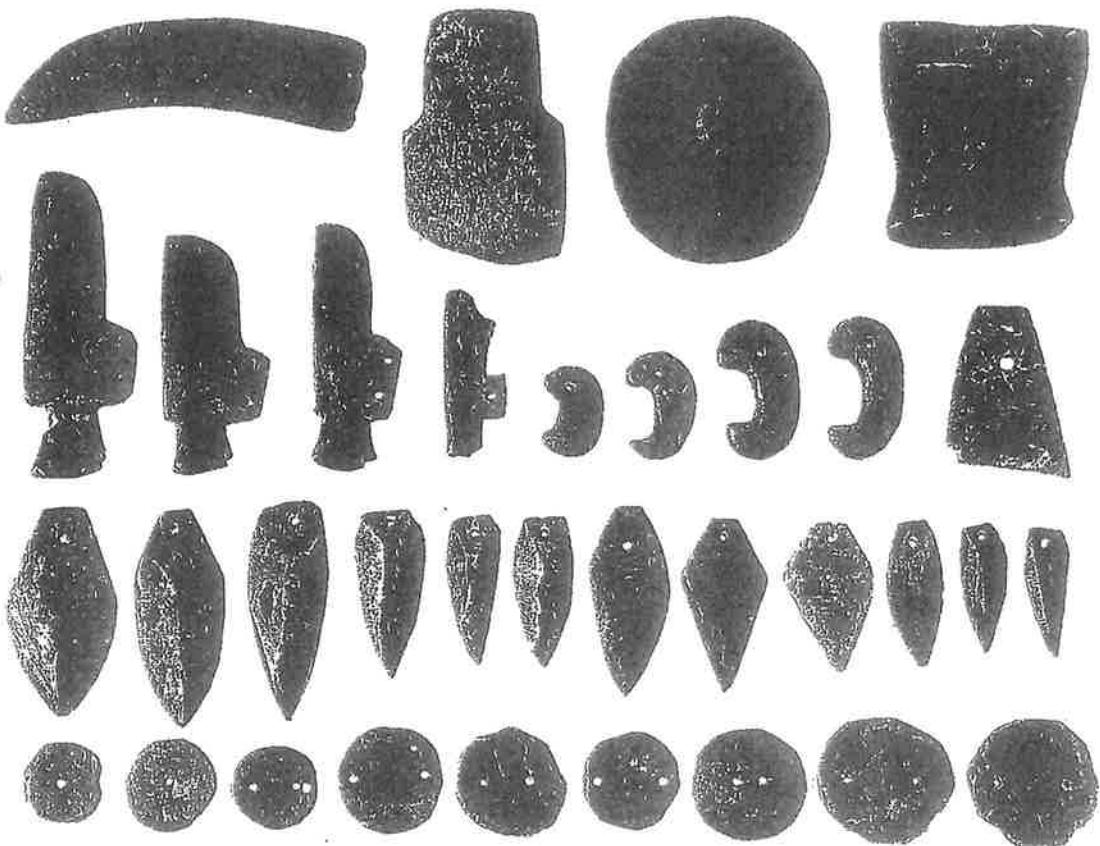


韓國 竹幕洞遺跡 遠景

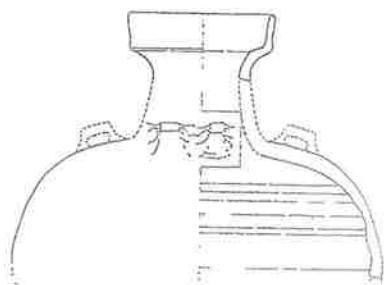
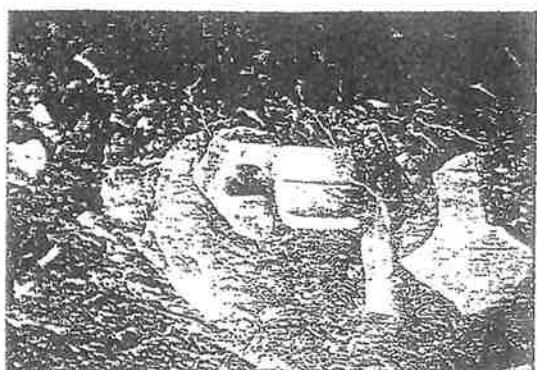
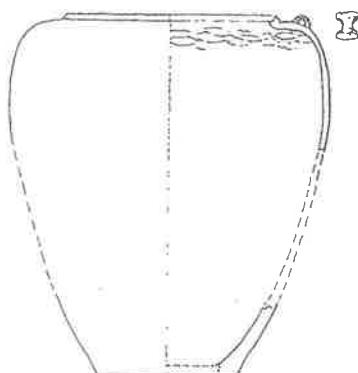


遺跡位置 古代航路

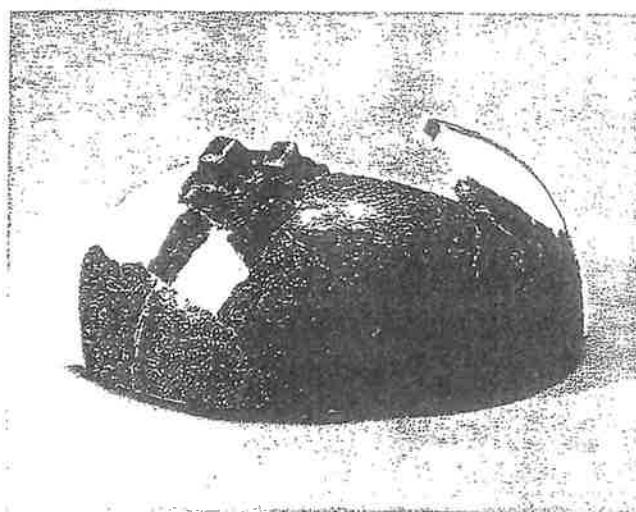
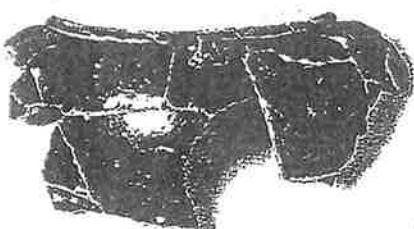
世界文化遺産研究会、2004年 国際学術研究会「古代正倉院研究会」



各種 石製模造品 MINIATURE EFFIGIES, Stone



青磁耳附盤口壺 出土狀態 APPEARANCE OF JAR WITH EARS, Celadon



青磁耳附盤口壺 JAR WITH EARS, Celadon

黑褐釉壺 JAR,

ろくどん遺跡(第4図082~101 第5図102~121 第6図122~154 第7図155~157)

中津宮境内遺跡の同丘陵上部に位置し、県道法面より採集された遺物である。遺物は丘陵に隣接する谷部に包含層として厚く堆積していた。同地点では弥生時代中期～後期にかけての遺物が多く採集された。器種には甕、壺、鉢、高坏があり、採集された遺物のなかには丹塗土器も多数認められる。また石器類も採集されており、155は石剣、156は磨製石鎌、157は片刃石斧である。154は楽浪系土器とみられ、壺の底部付近が残存する。内面は当て具による器面調整のちナデ・横ナデによる仕上げ調整と外面には縄蓆紋タタキを施す。

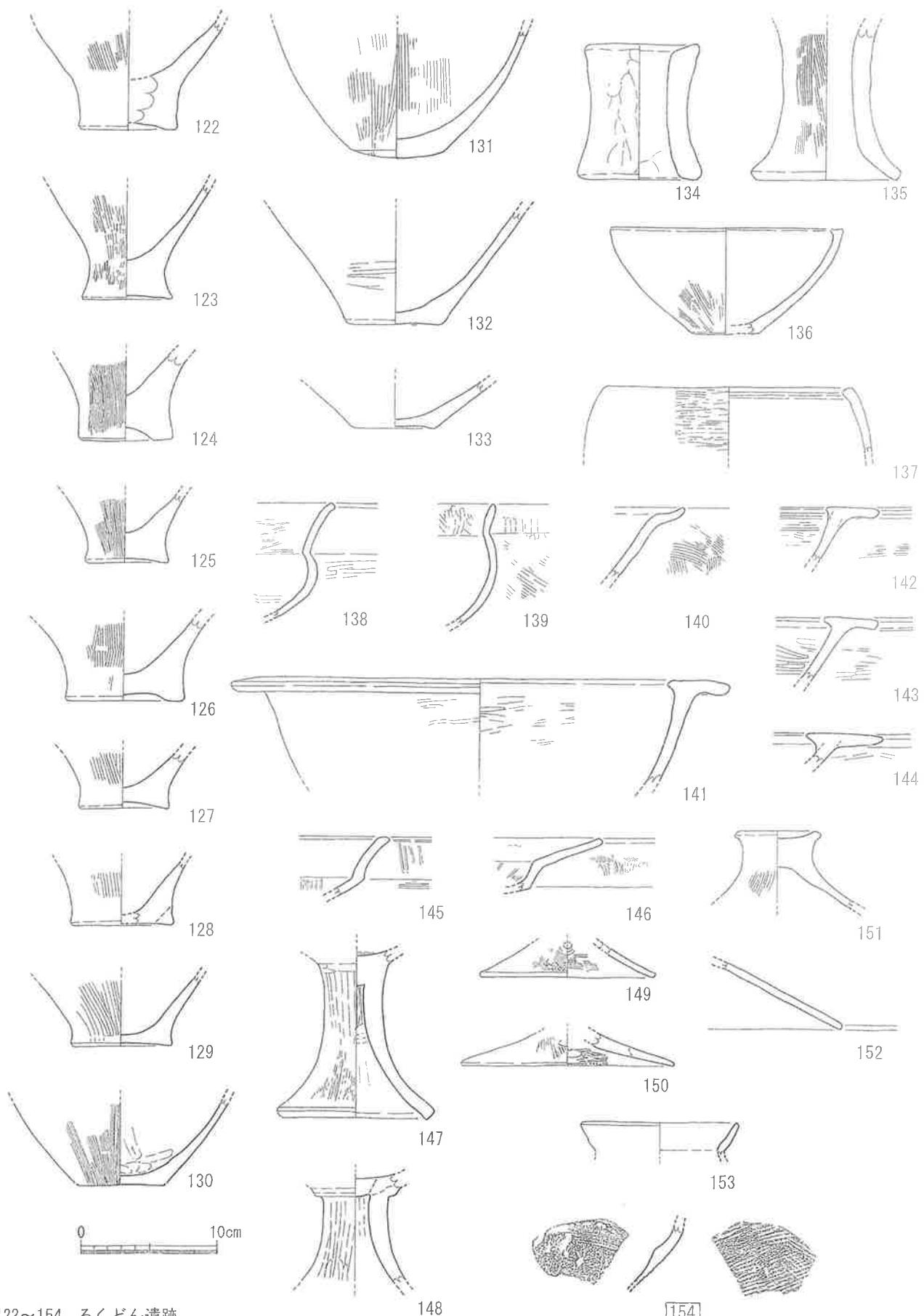
遺物番号	種類	器種	遺跡名	法量 (復元値)、単位cm	調整	胎土	焼成	色調	備考
138	弥生土器	(台付) 鉢	ろくどん 遺跡		内面は口縁部ミガキ、胴部上位ヨコナデ、他はハケ後ナデ。外面は口縁部ヨコナデ、他はミガキ。	4mm以下の白色砂粒含む。	良好	内外面とも橙褐色	
139	弥生土器	鉢	ろくどん 遺跡		内面は口縁部ハケ目後ミガキ、他はナデ。外面は口縁部ミガキ、胴部ハケ目、下位はその後ナデ。口縁端部ヨコナデ。	2mm以下の白色砂粒を含む。	良好	内-橙褐色 外-橙褐～暗褐色	
140	弥生土器	鉢	ろくどん 遺跡		内面は口縁部磨耗、他はナデ。外面は口縁部磨耗、他はハケ目。	1mm以下の白色砂粒を含む。	良好	内外面とも橙色	
141	弥生土器	高坏	ろくどん 遺跡	口径(37.0)	内外面ともにミガキ。	3mm以下の白色砂粒を含む。	やや不良	内外面とも淡黄褐色、顔料赤褐色	内外面ともに丹塗り
142	弥生土器	高坏	ろくどん 遺跡		口縁部外面ヨコナデ。他はミガキ。	1.5mm以下の白色砂粒を含む。	良好	内外面とも橙褐色	
143	弥生土器	高坏	ろくどん 遺跡		内外面ともにミガキ。	2mm以下の白色砂粒を含む。	良好	内-褐～橙褐色　外-橙色	内外面ともに丹塗り
144	弥生土器	高坏	ろくどん 遺跡		内面はヨコナデ。外面は口縁部磨耗、他はミガキ。	2mm以下の白色砂粒を含む。	良好	内外面とも黄灰色	内外面ともに丹塗り
145	弥生土器	高坏	ろくどん 遺跡		内面は口縁部磨耗、他はミガキ。外面は口縁端部ヨコナデ、口縁ミガキ、他は磨耗しているが少しハケ目が残る。	4mm以下の白色砂粒を含む。	良好	内-橙褐色 外-橙褐～淡黄褐～黒灰色	
146	土師器	高坏	ろくどん 遺跡		内面はヘラミガキ。外面はハケ目後ヘラミガキ。	2mm以下の白色砂粒・微細な雲母を含む。	やや不良	内外面とも橙褐色	
147	弥生土器	高坏	ろくどん 遺跡	脚部径(11.6)	内面はケズリ出し後ナデ。裾部ヨコナデ、外面はミガキ。	2mm以下の白色砂粒を多く含む。	良好	内-橙灰色　外-橙色	外面丹塗り
148	弥生土器	高坏	ろくどん 遺跡		内面は脚部シボリ痕、坏部はナデ。外面は脚部ミガキ、坏部と脚部間に三角突起がありヨコナデ。	3mm以下の白色砂粒・赤色砂粒含む。	良好	内外面とも橙色	外面丹塗り
149	土師器	高坏	ろくどん 遺跡	脚部径(13.0)	内外面ともにハケ目。裾端部ヨコナデ。円形スカシヶ所残存。	2mm以下の白色砂粒を含む。	良好	内外面とも橙褐色	
150	土師器	高坏	ろくどん 遺跡	脚部径(15.8)	内面ハケ目、外面はハケ目後ナデ。	2mm以下の白色砂粒・微細な雲母を含む。1mm以下の黒色砂粒を少し含む。	良好	内外面とも橙褐色	
151	弥生土器	蓋	ろくどん 遺跡	つまみ径6.4	内面はつまみ部ナデ、他は磨耗。外面はつまみ部ヨコナデ、他はハケ目。	2mm以下の白色砂粒を含む。	やや不良	内-橙褐色 外-橙褐～白灰色	
152	弥生土器	蓋	ろくどん 遺跡		内面ナデ、外面磨耗。	3mm以下の白色砂粒を多く含む。	やや不良	内-橙褐色 外-橙褐～橙灰～淡灰褐色	
153		壺	ろくどん 遺跡	口径(11.6)	内外面とも回転ナデ。	0.5mm以下の白色・黒色砂粒を含む。	良好	内外面とも暗灰色	楽浪系 154と同一個体?
154		壺	ろくどん 遺跡		内面は上位ナデ。他は回転ナデ。外面縄蓆紋タタキ	微細雲母片・白色砂粒含む。	良好	内-灰～暗灰色 外-黒灰色	楽浪系 153と同一個体?

石器計測表

遺物番号	遺跡名	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	備考
155	ろくどん遺跡	石剣(小型)	10.3	3.75	1.0	頁岩	
156	ろくどん遺跡	磨製石鎌	5.9	1.9	0.7	頁岩	
157	ろくどん遺跡	片刃石斧	9.8	2.6	1.3	シルト質頁岩	縦長剥片の端部背面を研磨

奈良市教育委員会(山田宏幸編), 2011年市内遺跡詳紹介分布調査報告書

『奈良市文化財調査報告書』第63集



第6図 遺跡詳細分布調査採集遺物実測図⑥ ($S=1/4$)

